

到彼岸に想う

大谷昭仁

暑さ寒さも彼岸まで。このころには決まって、本堂の裏に彼岸花が顔を出し、夏の終わりと秋の初めを告げてくれます。

世間には、文化の呪縛とでも言いましょうか、その由来も意味も分からないまま、ただ年中行事となつて執り行われるイベントが多々あります。そのなかの一つがお彼岸です。彼岸にはお墓参りをして先祖に思いを手向け、仏事をおこなう宗教行事となつていますが、残念なことに、インドや中国にはない仏教行事がいつ頃か、何故、日本に定着したのか皆目分からないそうです。

日本における明確な四季の循環、稲作を中心とした農耕サイクルとの関係などが考えられますが、これといった決め手はありません。しかし、彼岸行事の記載はふるく、古代にはすでに彼岸が国家的公式の行事とされ、また、源氏物語をはじめ平安初期の諸文献にも散見されるので、このころには民間でも定着していたことが分かります。

「彼岸」は文字通り「彼岸」ということで、あちら岸です。したがって、今いるところは此岸、つまり、こちら岸。「彼岸」は、こちらからあちらへと川や海を渡るイメージをもっています。ですから「彼岸」は正確には「到彼岸」と言っています。古来の日本人は人が死ぬと単純にあの世へ行くと感じていました。あの世は山や海であり天上や地下であったりしますが、とにかく、死んだ先祖が行く場であり、そこにとどまり、また帰ってくるという古代の民族信仰がそこにはあります。このような素朴な信仰をベースに、秋の農繁期を迎え、先祖のお蔭と、大地や太陽への感謝が彼岸の行事を形作つていったのかもしれない。毎年繰返される不安定な農耕収穫と先祖信仰を背景に、農耕の休閑期と時候のよさとがあいまつて、日本の民衆に古くから広まっていた行事と考えられています。

しかし、民族文化の底辺を流れる素朴な「あの世」の観は、時代の推移とともに、私たちの解釈から内面の実相に注意が向けられていきます。ここに仏教が大きく関わり合いを持ったことは言うまでもありません。「彼岸から此岸へ」を「娑婆から浄土へ」に転換することによって、民族の生死観におおきな目覚めをもたらしました。つまり行ったり来たりするこの世やあの世は所詮現世の延長であり迷いの輪廻界でしかないのでは。娑婆世界から悟りの世界への解脱をまつて、真に到彼岸が実現することに目覚めた日本人が育つていたのです。この時に、日本人は「ヒト」から「人」になつたのではないのでしょうか。



もちろん、一足飛びに、人間観が深まったわけではありません。当初は、あの世を極楽浄土とみたくて、春と秋の彼岸に仏教行事をとりいれて、次第に、仏教の教えに目覚めていったに違いありません。

初期の彼岸行事で有名なのは、聖徳太子縁の四天王寺・西門外所の西方浄土信仰があります。太陽の真西に沈む方向に遠く浄土を観想するこの信仰は、太子信仰と結びつけられ、古代の浄土信仰を今に伝えています。『四天王寺御手印縁起』の虚偽にも関わらず、今なお、彼岸には大勢の人が詰めかけ、先祖の供養や太陽信仰のなごりを見ることができます。

イメージトレーニングに「観無量寿経」の理想観の行法を示して、『冬夏の両時を取らず唯春秋の二際を取る、その日正東より出て直西に没す阿弥陀仏国は日没処にあたる』とその時所を述べました。このように西方極楽浄土を観想する上で、「彼岸」はあらたな意味を持つて登場することになったのです。

何故に西方浄土なのか。時空間の観念にとらわれた煩惱具足の凡夫が、時空間を觀念にとらわれない浄土を見ることはあり得ません。しかし、浄土への往相がこの身に実現されるためには明確で寸分狂いのないイメージを必要とします。その意味で、浄土を目指す凡愚身において西と定められたことはとりわけ重要なことなのです。この方便の浄土は、信心を決定し此岸から彼岸に渡る生身の凡夫にとつて欠かせない方位なのです。

亀山本徳寺では九月二十一日から二十三日まで三日間、お彼岸のお勤めを執行します。「世界は燃えている」と直感されたのは積尊です。此岸の人は御しがたい欲求と恐怖を抱えて底知れぬ不安と飽くなき夢から一刻も逃れることはできません。此岸から彼岸に、迷いの世界から目覚めの世界へ、仏様に、終生、問題とされ、目覚めてくれと願われている「私」と向かいあった時、浄土真宗の「法」の世界が開かれます。どうぞ、お誘い合わせの上、本徳寺の彼岸讚仏会にご参集下さい。

秋彼岸讚仏会の日程

九月二十一日・二十二日・二十三日

午前七時半	晨朝 勤行	引き続き聴聞
午前十時	門信徒 勤行	引き続き聴聞
午後一時	讚仏会 勤行	引き続き聴聞

布教使 善徳寺 望月覚師
行事所 亀山本徳寺本堂

姫路市亀山三三四・電話二三五〇二四二
山陽電車「亀山駅」下車東スグ